

總持寺宝物殿所蔵『道正庵文書』

大本山總持寺宝物殿館長 納富 常天

曹洞宗大本山總持寺宝物殿の資料は、總持寺伝承のものと、近世以降、独住歴代禪師や道正庵、および檀信徒から寄進をうけたものからなる。これらは平安時代から現代にわたる絵画・彫刻・工芸・典籍・書跡・拓本・古文書などからなっており、重要文化財五件、横浜市指定文化財四件を含んでいる。このうち古文書資料は中世から近代まで一五〇〇点余りあり、量的に豊富であるのみならず、質的にもすぐれており、文化財として評価できるものを多く含んでいる。^①

これらは内容的にみた場合、大略(1)總持寺自体の成立と発展に関する資料、(2)出世道場・大本山としての總持寺に関する資料に大別することができる。まず(1)總持寺自体の成立とその発展に関する資料は、鎌倉時代から現代までにわたり一九〇点を数えるが、中世関係が大部分で、一六〇点余りにのぼっている。その大部分は大久保道舟編『曹洞宗古文書』(一二二六点)、大本山總持寺編『總持寺誌』(一二三二点)、『加能古文書』(一二三五点)などで公刊さ

れており、未刊のものが一六点あったが、『新修門前町史』にすべて収録された。

つぎに(2)出世道場・大本山としての總持寺に関する資料は、江戸時代のもものが中心であるが、中世関係の三〇余点を含み一三八四点からなっている。これらは『延享度曹洞宗寺院本末牒』の関係資料や、栗山泰音『總持寺史』に部分的に発表されたもの、さらに『新修門前町史』に収録されたものをのぞき、大部分は未知の資料群である。

このように二つに大別できる資料は、總持寺の成立と発展過程、出世道場および大本山としての地位確立、さらには中世末期から幕藩体制下における總持寺教団の全国的な展開や、本末関係を明らかにするものとして非常に重要である。

ここに紹介する道正庵文書は、『新修門前町史』總持寺編の調査の過程で新たに発見されたもので、七〇点⁽²⁾からなる。整理も一応終了したので活字化することにした。

道正庵については栗山泰音『總持寺史』や『永平寺史』などにも記述されているが、従来の研究によると、道元禪師に随い入宋した木下道正(一一六九—一二四八)の開創にかかり、後世は神仙解毒万病円の製薬・販売と、曹洞宗出世僧の参内について、伝奏勸修寺家へ取りつぐ役割をつとめており、また同時に参内する出世僧が宿泊する衆寮を経営し、参内における坐作進退なども指導したとされている。

道正庵跡は現在、京都市上京区新町通寺之内上ル東入道正町四六六番にあり、当主は木下武彦氏である。去年十二月二日、非礼とは知りながら突然に訪問した。はじめは不審に思われたが、事の由を申し上げると、心よく応じて頂きお話を聞くことができた。その概要はつぎのとおりである。

(1)上京区にある道正町・木下町一帯は、後堀河天皇から拝領したが、現在は道正町のこの一角をのこしているのみである。しかしこれも永平寺六十四世森田悟由禪師(一一八三四—一九一五)の大きな援助によったものであ

る。

(2) 戦前までは製葉していたが、原料の入手が出来なくなったので、止むなく製造を中止した。

(3) 薬品製造の調合等に関する資料は、永平寺に寄贈した文書中にある。

道正庵および永平寺に寄贈された道正庵文書については、昭和六十二年から平成十四年まで『傘松』に熊谷館山・木下忠三・圭室文雄・熊谷忠興・栗野俊之・林謙介・弥永浩二・沢田善明・皆川義孝氏などによって一部ではあるが解説紹介されている。

宝物殿所蔵の道正庵文書は、道正庵十九世徳幽卜順から二十七世勝順にわたるもので、内容的には(1)出世関係(推挙・官物・転衣僧等に関するもの)(2)朝廷関係(即位・改元・崩御等に関するもの)(3)禁裏火災関係(4)勸修寺家内室・道正庵主死去に関するもの(5)その他からなる⁽³⁾。

これらはいずれも總持寺と道正庵の密接な関係を示すもので、非常に貴重である。なお解説にあたっては宝物殿学芸員井原淑朱・遠藤ゆかり・涌井愛および納富があたり、成稿は主として井原が担当したが、校正は井原と納富があたった。また解説にあたり神奈川県立金沢文庫鈴木良明学芸担当部長(現文庫長)、横浜市歴史博物館小林紀子学芸員に助言を得た。

注 記

(1) 棒目録を『横浜市文化財調査報告書』第二十八輯の二に収録した。

(2) 道正庵関係資料は一〇四点あるが、『転僧数覚』『転衣寺院員数控』『永平寺・總持寺転僧中道正庵着帳覚』など主として冊子資料は省略した。

(3) これについての概要は總持寺宝物殿井原淑朱学芸員が、平成十七年第五十一回宗学大会で発表し、『宗学研究』第四十八号に掲載予定である。

凡例

- (1) 構成は原則として年代順にした。未詳の場合は関係すると思われる所に入れた。
- (2) 改行・空白等も原文通りにした。ただし追って書は巻首に三字下げで掲げた。
- (3) 漢字の行・草書体はすべて楷書体とし、略字体および異体字などは原則として原文通りにした。
- (4) 虫損・汚損等により判読出来ない場合はその字数に応じ□□または□□とした。
- (5) 前欠・後欠の場合は(前欠)(後欠)とした。
- (6) 異筆の場合は当該部分に(異筆)とし括弧を付した。

(一) 十九世卜順代

1 道正庵玄由書狀 (3—7)

尚以此地御用之儀者

可被仰儀候以上

如来命新年之吉慶

萬々奉申由候從

御開山様(銀九)良十匁被懸

尊意誠以過量奉存候

頃過二月五日ニ永平寺

江戸へ御下りニ候定而

後住之義ニ御下りと

奉察候為御存知候恐

惶頓首

(寛永十一年九)
三月八日

玄由 (花押)

看方丈様

維那様

林□□様

貴答

2 道正庵玄由書狀 (3—10)

大安寺登山候間一書令啓

上候仍推拳狀御返書五通

進上候可有御請取候先日

申上候掛落之代天昌寺ニ

御越無之候者此大安寺へ

御越尤候賣主切々コイ

申候故申上候代ヲソク遣候へ者

代高ク候事候以来共ニ

其御心へ御尤ニ候恐惶頓首

(寛永十一年九)
五月十四日

道正 (花押)
玄由

惣持寺

進上 維那様

3 道正庵玄由書狀 (3—1)

五院之内一院御上洛之刻御宿者

先年御借りノ□□所ヲ借り忝

申候間可被御心安候永平寺ハ本屋ニ

被居候事候以上

謹言上 抑如例年為手代

此者指下候御祝儀迄解毒

百粒宛進上仕候當年者薩摩

守殿爰元被成御宿候ニ付延引

申候 上様當月廿日ニ江戸御立

被成候由申候五院之内一院為御

礼御朱印持参候而御上洛可

然奉存候永平寺も参内可被成

トテ御上洛ニ候定而上様へ御礼

可被仰ト存候此方へも使僧給從

此方も切々人ヲ進候併未懸御目候

尚此九兵衛可申上候恐惶頓首

(寛永十一年カ)

六月廿四日

道正(花押)
玄申

進上五院様

衣鉢閣下

4 道正庵玄由書状 (3 | 15)

尚以来年者弥江戸へ五院之内

御下向之様ニ候哉承度候以上

昌福寺様へ可願御心得候

芳春院様へ先日者忝旨

被仰上可被下候

御誂へ之道具永平寺へ掛落迄持せ下候とて

越前迄ハ此方之者ニ持せ申候越前ら

其元へ此長老持参候少御礼御申尤ニ候

石州長安寺登山候間令啓上候

先度者登山申候處種々御懇意

之至不淺奉存候 五院様御寺僧

衆様へも名々ニ可呈一翰候へ共可然

様ニ可願御心得候仍貴寺様紫衣

御参内御綸旨之義勸修寺様へ

申入候處ニ何茂御公家中御双談(ママ)

被成從是御世事可被仰旨候於尾

成者何時ニ而も飛脚指下可申候

右長安寺官物石州之ハイブキ持参

申候間一兩ニ付六十目宛ニ御取被下候様ニと

被申候一二兩ハカ、リ申度旨候間左様ニ

被成可被遣候爰元御用之儀候者

可被仰付候恐惶謹言

(寛永十一年カ)
小春十又二

道正庵

進上看方丈様

侍司下

玄由(花押)

永福寺様

5 道正庵玄由書状 (3—5)

尚以大寧寺宗椿和尚せんけ

てつたん和尚大寧寺ニ御座候間

五院と御とぶらい文被遣間敷候や

永福寺へ申候

たんば之坊主之

書物芳春院被遊由

出来次第可被下候以上

長州洞玄寺登山ニ候就其

官物即持参候間一兩ニ付六十目

ツ、ニ御取被下候へとの御事候

大寧寺と被遣候出世候間

左様ニ被成可被遣候爰元之

そうはハ六十三匆仕事候

為御存知候頃内、貴寺様

御繪旨参内之義切、

勸修寺殿迄申入候へ共未御呼事

無之候お取成者飛脚進上

可申候先日石州之転奏へ委

文進候間不詳候恐惶謹言

(寛永十一年カ)
小春十又七

木下道正(玄由)
(花押)

進上 太清院様

永福寺様 参

6 道正庵某書状 (3—6)

覚

一銀九百五拾目ハ掛落五十丁之代也

但壹丁ニ付而拾九匁宛

右之銀請取覚

一 銀百六拾七匁九分八但玄濟寺と請取也

一 同百四拾三匁壹分八但長盛院玄濟寺
金貳兩壹分之代銀也

一 小判拾兩此代銀六百廿六匁也
但壹兩ニ付而六拾三匁六分ツ、也

一 銀三匁八銀ニ而請取申候

右四口合九百五十目也

一 銀拾匁 加州天徳院迄届申入用

惣合九百六拾目也但源五郎殿御

手前分請取申候

木下

寛永拾貳年 道正庵在判

卯月九日

惣持寺

御納処様

まいる

7 道正庵玄由書状 (3—3)

尚以御用之義候者可承候

長々勸化之儀諸山へ不申候共

貴寺永平寺と

被仰入御立○可被下かと

永平寺尊意候へ共

従前々諸山へくわんげ○仕ツケ候間

左様ニハ此方ニ同心

不申為御存知

申上候以上

又申諸山へ従永平寺添状

被成候従貴寺も添状可被遊候哉左候者

五院御朱印十まい斗可被下候く

當庵本屋衆寮勸化ニ付

金三兩已下誠以不俟奉存候

雖然従永平寺金拾兩二月

廿八日之日付ニテ勸化御入候

貴寺様之義連く御懇意

候間此芳金ハ不被下候共

拾兩ト付可申候力但如何

候ハん哉急度轉衣僧ニ可被

仰下候五院様へ御別書

可申上候へ共可然様ニ右之旨

所仰候恐惶頓首

卯月十二日
(寛永十二年九)

道正庵
(花押)
(玄由)

拜呈 太清院様侍司下

8 菩提寺光存書状 (3—4)

覚

一金子六兩

一同金二分

一同金二分

一同銀子五匁四分

合金子七兩ニ請取申候則道生へ
(正カ)

差渡可申候已上

寛永拾貳

九月廿四日 菩提寺

維那 御兩人様 光友 (花押)

納所代 参

9 道正庵某書状 (3—8)

□

追而令啓候仍此

高海ニ其地諸

事ニ付御馳走

頼存候早々事

濟御上京候様ニ

可被成候且又掛羅

之義のそミ有

之様之ニ御物語

候間くわら代ヲ

被遣御尤カと存候

猶委布ハ期

後音候恐惶謹言

道正庵

三月五日 二而

維那御

玉床下

木下と

(總持)
□
(維)
□
那

玉床下

10 道正庵玄由書状 (3—12)

又申入候駿州瑞龍寺官物

之かゝり金壹兩今日此方へ

請取申候掛落之代ニ御指

引尤ニ候大廣寺と合六兩

請取申候瑞龍寺借状今度

妙高庵御追院之刻必此方へ

可被下候駿州へ慥届可申候

御失念被成間敷候以上

八月五日

道正(玄由)
(花押)

11 道正庵元友書状 (3—9)

尚以わんずし義承候一まき六十目ニ

随分念入調進上候金三分二しゆ来候

此代五十七匁五分也指引二匁五分之(也カ)

うけたまわり候委ハ林長可被仰候

御そくさいに候目出たく候く

一よどの東雲寺官物未進二兩之所ニ

くわら八丁此度遣候此以前一兩ハさん用

申候合三兩分之借状可在之候間

急度可被下候

今度太清院御上洛給候と

得貴意本望存候轉奏衆(僧カ)

多無之候てせうしニ存候閑東

僧祿衆(マヤ)へ使僧被遣可然

存事候委ハ林長へ申談候

永福寺煩如何云と無御心

元存候先日兩度御書狀申候

可相届と存候見事之さめのり

一袋忝く候従是茶一袋進

上申候久不得貴意御床布

奉存候恐惶謹言

八月十日 元友(花押)

進上

看方丈様 貴答

12 道正庵元友書狀(3—14)

泉白老へ之路錢十五匁ニて

十匁と書たるハ違ニて候以上

一番ニト申候掛羅之さん用少違

申候能々御らん可被下候其方と

写被下候遣候玄濟寺と三百め請

取申候百六十七匁九分と書申候ハ禁中

御年頭ヲ引候てさん用申たる物と

存候喜庵ニ下候くわら十衛門殿ニ

下候くわら兩度之代不濟候一丁ニ

付老分ツ、ニ候此長老へ急度御上せ

頼申候

一御朱印箱之義全達和尚先年数

度御申候其後江戸ニてもめいわく申候間

然ニ念入名ラバ御くげれきく衆へ

頼入調此度下申候代金式分ニ而候

くわん共ニ随分く念入申候其元何も

御無事ニ御座候哉恐惶謹言

九月十四日 道正

元友(花押)

看方丈様

維那様

13 道正庵玄由書狀(3—13)

尚以御寺僧衆様へも乍慮外

可預御心得候以上

先日貴山申候處種々様く御馳走

忝次第奉存候五院様芳春院様へ

以別書可申上候へ共可預御心得候然者

洞泉庵様へ(川カ)小判九兩御渡候て可被下候

貴寺様へハ掛落之代ニツギ可申候

掛落當年中ニ下可申候哉但来春

下可申候哉可承候御頼被成候様成

道具九條ありかね申候今少かね

御たし候てあたらしく御ならせて候

可然存候急便候間早々申上候恐惶

謹言

九月十六日 道正

玄由 (花押)

進上 看方丈

太清院様

此度之ヲ留申候以上

防州心嶽寺登山候間令啓上候

就其本寺へ官物之内金四兩

於爰元請取申掛落之方へ

相渡申候間其御心得尤候播州

長老ニ金五兩請取申候洞川庵

御下り付候ハんと察候相殘ル

處此長老持参候者御越候

可然存候ヒウチほうちやく者

来春九兵へニ下シ可申候恐惶

謹言

壬十月六日 道正玄由 (花押)

進上 太清院様

昌岩寺様人々御中

14 道正庵玄由書状 (3—11)

尚以播州長老之官物掛落之

方ニ置候ハでと被仰候由候間さて

15 道正庵玄由書状 (3—2)

尚以何ニても御用ニ候者可承候

先日者いろく御ちそう忝候へく候

くわしくハ永福寺へ申入候

ちごもんしゆさんたれ人も

不知候能キ便ニ御上せ候へ

見せて可進候きぬニて候間

代たかくハいたしましく候

正受寺金壹兩ニ御上ケ候由

承候へうぐ入めト壹兩ニ

我等ニ被下候者取申度候

仏祖くたかく御納とら者

うり候て進上申候へく候我等写

木候へ共名不知候其上きぬ

ニて候間代ハいたしましく候

へ共絵見事ニ候間右之代

ニて被下候者所望申度候

恐惶謹言

十一月八日 玄由(花押)

進上

看方丈様まいる

16 屈原漁父問答函寄進状

諸嶽山總持大刹者 瑩山大禪師之開闢而

峩山大禪師為第二祖之勝境也聲名遍于宇

内 後醍醐天皇勅願所而曹洞家為出世改衣

濫觴之靈場也 後奈良院寛永聖皇亦再賜

鳳詔矣是故予家元祖藤原隆英卿號縣山居

京洛木下故世曰木下歴左兵衛督正四位下叙從三

位任左衛門督法名道正 寶治二年七月廿四日卒

葬于宇治興聖寺第二世左兵衛督從四位下降

實道號嘿外法名紹門第三世治部大輔正四位

下範房道號惟寧法名道琢第四世典藥頭正

四位下忠俊朝臣道號芳岳法名良信始為官

醫及老年剃髮祿元祖之法名號道正菴又曰

味杏堂從是累世至于今日道正菴也第五世宣

安字愚傳第六世睦用字寂然從二世至六世不

知所以何處葬焉故予建碑於興聖禪刹也第

七世一伯字悟関第八世玄榮字別叟第九世昌

順字明室中院大納言通氏卿男玄榮養子第十世

康琳字撲堂第十一世道壽字松隱大内氏贈三品
政弘朝臣男康琳養子第十二世立敬字他誰四條
巫相隆量卿男道壽養子第十三世了意字了絶
正親町院為侍醫叙法印第十四世宗源字淨本叙
法印第十五世玄養字文如叙法印第十六世
一貞字直翁第十七世宗固字堅巖第十八
世休甫字携室佐々木氏源一綱男宗固狼子
以他姓雖相續從元祖道正至于予不失其統
譜者其致一也哉安養寺開山宣阿彌上人者
一伯族弟也是以一伯創于安養寺為累世
之墓地是故從第七一伯至于予父休甫葬
于安養寺也予家凡為序次如右矣元祖道
正之榜及歷葉之榜立 尊檀而捧李翰
所筆屈平漁父問答圖而已矣
寛文八年八月廿有八日

道正菴第十九法眼徳幽下順敬記

(朱印)

(二) 二十世恒順代

17 道正庵恒順書狀 (5—1)

猶、日本中一宗之 綸旨吟味
之儀終^(九)下順代拙者迄勸修寺殿
取次不仕候先年其御境 綸旨之
写一覽有度旨勸修寺殿被
仰聞候故其時分文貌和尚へ申談
其御境 綸旨写共参候而勸修寺
殿へ進置候左様^二御心得可有之候
以上

当月十九日之御飛札
同廿三日及夜陰到来
得其意候然者宝圓寺
綸旨之写拜見申候
寛文拾年春之比右
之案文從勸修寺殿
吟味可仕旨被仰聞候
則同年四月廿八日之

日付^二而芳春院文貌

和尚^へ彼写拙夫状相

認指下相尋候其御

境^二右之文言 綸旨

無之旨預御報候其後

同年八月三日之日付^二而

寶圓寺^へ右之写指下

相尋候處尔来右之通

綸旨頂戴申度

旨候得共勸修寺殿得

与合点不参候其上

御當代之儀ハ被窺

江戸儀且總持寺認

状無之 禁中邊之

御取次罷成間敷旨

事相調候今度勸修寺

殿^へ弥相尋貴答申

度候得共急^二ハ勸修寺

殿御返事知申間敷

候間先飛脚指下候

最前其御境^へ付届

不仕事^二而ハ無之候

綸旨案文之写芳春院

文貌和尚^へ相認候状可

有御座候御自得御覽

可被成候恐惶敬白

道正庵

(寛文十一年九)

七月廿六日

恒順 (花押)

總持寺

五院

貴報

18 道正庵恒順書状 (1—20)

尚々勸修寺殿借金百兩

之儀無御失念来春早々為御登

待居申候以上

先日者乍貴報拜見

先以其御地弥御無事之由

珍重御座候此方無別

条罷有候

一勸修寺殿借金之儀百兩

御借_シ可被成旨其段申達

候處_ニ御拂庭_ニ候得_ハ無是

非候百兩_ニ而も御借可忝

旨御座候間来春雪消

候時分幸便次第造成

同道多_キ出世衆便宜_ニ

成共必無御失念為御登

可被成候最早此方_ハ

以飛札も申入間敷候間

左様_ニ御心得可被下候

一 小川庄左衛門罷歸為申聞候

今度五院之中解毒圓

例年之通納申間敷旨

御座候處別而御肝煎

被下先規之通罷成候由

忝御座候重_而其段御礼

可申謝候間申殘候恐惶敬白

道正庵

(寛文十二年頃カ)
霜月廿一日

恒順 (花押)

芳春院

衣鉢閣下

19 道正庵恒順書状 (1—9・10)

(前欠)

乍御報拜見

一 爰元方、承合別_ニ覚

書懸御目候

一 此方兩本寺之儀ハ古来_ハ

大徳妙心兩寺同等同位_ニ

候故万事此兩寺承合

致同事候併今度大徳

寺殊外被情出候妙心寺も

先年御炎上之時分傳

奏甘露寺殿へ心入結

構^二候故只今此兩寺同

時^二ハ過分^二候間相止候

一江戸 公方様へハ其御地

御使僧ハ五院之中和尚衆

被下候哉但平僧衆^二而相濟

候哉勸修寺殿被相尋候

拙者申候ハ時々^二而和尚被下候

又平僧衆も參候而江戸

相勤之由申置候左様^二御

意得尤候

一先年兩度 禁中御

炎上何茂卜順御取次覺申候

就其先例之様^二仕候左様^二

候得ハ世間之褒貶不苦

間敷哉と被存候其時分

勸修寺殿燒不申候得共

為届綿五把參候勸修寺

殿兩家老も燒不申候故

何^二而も不被遣候

一何方も六御所へ被指上

候得共此方兩本寺之儀ハ

綸旨官物他御所ハ構不

申候 禁中斗官物指

上候就其先年兩度之

御炎上^二も 禁中迄

綿廿把指上候左様^二御意

得置尤^二存候

一 禁中へ白綿廿把勸修寺

殿今度燒候故同廿把兩

家老燒候故銀子三枚

宛^二而相濟候

一其御地御狀印判^二而候最

前書判^二而候如何之由

勸修寺殿被仰候定^而江

戸御老中^へも印判之状

^二而可有之旨申置候左

様^二御意得全^而ハ其許

御吟味江戸御老中并

印判^二而も書判^二而も可

然候

一 判紙十枚慥^二相達候御

披露状一通私之状

一通二枚遣候殘八枚ハ後

便^二返進可申候

一 勸修寺殿^へ参候状之案

文書写遂之候

一 禁中^へ御上被成候綿

廿把御使僧持参勸修寺

殿^方御披露状相添

勸修寺殿家老案内

者^二而則被指上候一段首

尾能 奏聞之由^二而

御座候

一 永井伊賀守殿^へハ永平寺

方状も音信も不参候故其

御地も同前^二事済申候口上

今度 禁中邊御火

事^二付色^二御苦勞被成

其上御屋敷迄類火^二焼

被成候由笑止千万奉存候

為御届以使僧御見廻申入候

一 永井伊賀守殿返事

口上^二而 禁中御炎上

私方も類火^二逢候付遠

路御使僧忝存候御使僧^二

意得可然様^二可被申由^二候

一 其御山御使僧ハ天寧寺

會下月端と申僧雇

遣候

一 勸修寺殿御報參次第

一 全^而指下可申候昨日勸修寺

殿伊賀殿^へ御使僧遣

相濟候

一 綸旨火事以後^ニ火事以前^と

吹拳状參候分頂戴候火

事以後京着吹拳状之

分ハ未 御機嫌窺

奏聞無之候併少々遅引

候共無別条相濟可申候間

御氣遣有間敷候

一 勸修寺殿^へ拙夫取次之百

兩之借金多分當年ハ返

弁可有之と存候處火事^ニ候

併水野民部殿^と作事

候得ハ頓^而返弁可有之候

若左様^ニ無之候ハ、少々延引

被下候左様^ニ御意得置

頼存候

一 今度焼失之分書立懸

御目候披見可被成候恐惶

謹言

道正庵

五月廿八日 恒順(花押)

總持寺

御役者中

20 道正庵恒順書状(1—13)

覚

一 大德寺九日御菓子箱壹

組五重外家仕諸管念

入壱重^ニ上候菓子十種宛入

合五十色代銀式百目宛^ニ而

仕 當今同女御法皇

同女院本院新院以上六御

所^へ被指上候勸修寺殿^へ自

十日三日之間人足百人宛

粥三荷酒五斗先合力

被申候其後勸修寺殿へ銀子

百枚同簾中へ 禁中へ

上候御菓子箱同前一組紹光

殿へ諸白一荷昆布一折

勸修寺殿兩家遣へ銀子

五枚宛参候

一 妙心寺壺分饅頭二百入杉

折^ニ入右六御所へ指上候傳

奏甘露寺殿今度焼不

被申候故何之音信も無之候

先年 禁中類火

甘露寺殿焼候時分金子

五枚音信之由申候

一 六条兩門跡毎日 御機嫌

窺色々看御菓子等被

指上候先年も重而名物之

御道具など被指上候是ハ

國取大名并^ニ候故諸寺之

引合^ニハ不罷成候

一 南禅寺并五山何^ニ而も上り

不被申候是ハ 公方^方公帖

^ニ而出世改衣之寺^ニ而候ゆへ

構不被申候

一 山門三井寺何茂上不被申候

御祈禱之卷数も上被申候

一 東寺壺分餅二百入杉折一

組宛六御所へ被指上候是又

御祈禱之卷数上被申候

一 泉涌寺壺分饅頭二百入

杉折一組宛六御所へ被指上候

一 知恩院智鑑火事翌

朝^方毎日 禁中法皇

女院為御見廻被参色々

御菓子酒被指上 御機

嫌被窺候傳 奏衆永井

伊賀守殿同事之由申候

右大方右之通^ニ御座候

21 道正庵恒順書狀（1—22）

尚々 勸修寺殿吊狀

御飛札之由可然候文章

如何^ニ思召候ハ、御判紙為御

登可被成候此方^ニ而相調相

達可申候以上

一筆致啓上候然者

勸修寺中納言殿

内室昨日遠行候

御飛札之由御吊狀

尙通為御登尤^ニ存候

為其如斯候洛中

其外近邊之寺方ハ

贈經諷經御座候へ共

其御院之儀遠國^ニ

候間御吊狀^ニ而相濟

可申候

一 卅日之地之穢之間ハ

奏聞不罷成候

先例何事^ニ而も

禁中邊勸修寺殿

御指合 綸旨頂戴

延引之刻拙者手形

仕出世和尚衆何も帰

國^ニ候幸便次第

綸旨送候例^ニ而候其

中在京 綸旨

頂戴願之方ハ其通^ニ候

此度も左様^ニ訴詔^(ママ)

可申覚悟^ニ而候左様

被聞召置尤^ニ候恐惶

敬白

道正庵

八月十一日

恒順 (花押)

惣持寺

五院

衣鉢閣下

(三) 二十一世貞順代

22 道正庵貞順書狀 (5—2)

尚々去年神主大和

上京之刻歸路銀不足之由

金子參分借申候此借金大和

自分之事^ニ候ハ、數年別^而之

仁々候間妻子^ハ借状相渡借金^ハ

合力^ニ可仕覚悟^ニ候兔角貴院^ハ

内證申上御指圖次第仕候様^ニ

申付候以上

追^而啓上小川庄左衛門指

下候間一筆令啓上候先

以江戸御下向御無事

御勤出入之一儀如何罷

成候哉千万無御心元候

御苦勞之儀致察候

此方之儀も先月十五

日恒順相果御存知之通

久候相煩難治之証覺

悟之儀^ニ而御座候得共

今更之様^ニ被存當惑

不及是非候老父も取

乱罷有候迄之仕合書

中難申盡候

一恒順遺物之印迄探幽

筆御衣達磨一軸胡銅

獅子蓋三足香炉

進送候

一先書^ニ御無心申入候尾州

正眼寺^ハ平僧地之儀解

毒圓每年被納候様ニ御状

一ツ被下可忝候正眼寺一分ニ而

私之様ニ候間貴院御状參

候ハ、少々内證左様ニ為申

聞他國并ニ相調可申旨

内證申来候間奉頼候

丹波へ被遣候御状御蔭

故首尾能相調忝奉

存候

一其御境門前より出火大分

焼却之由笑止千万ニ

存候併方丈伽藍五院

其外塔中御無事珍

重至極候恐惶敬白

道正庵

(延宝五年カ)
五月十五日 貞順 (花押)

23 道正庵貞順書状 (1—17)

猶以御使憎之儀ハ 後光明院御

時ハ爰元ニ而一宗之僧侶似合敷

方為見合道具衣ニ而相調候左様ニ

候得ハ尊院より為御登不被成相濟候

此度も御當地ニ而為見合事濟可

申候哉貴報承度候以上

態以飛札啓上

女院様昨日申刻御他

界被為成候就其先

早々御左右申入候

一御葬礼之儀も定_而泉涌寺

_ニ而御執行可有御座候哉

昨日之儀_ニ候故尔と不奉

存候稻葉美濃守殿

當月六日 女院様

御不例為御見廻御上洛候

定而万事美濃殿御

才判可被成奉察候

一出世和尚衆 綸旨頂

戴之儀定而五十日罷

成間敷存候先例

禁中御指合之時分ハ吹

拳狀勸修寺殿^ハ相達

何も和尚衆勸修寺殿

迄参入付届相济其

上何も帰國御指合相

济候以後拙庵^ハ頂戴

國^ハ幸便次第送

申候此度も左様^ニ願申事候

其段も未御相談不罷成候

重而可申入候

一先年 後光明院御

崩御之時分般舟院^ニ而

御中陰御法事洛中

之一宗諸山贈經被仕

御諷經御布施被下候兩

本寺之儀ハ遠路^ニ而

不罷成御使僧泉涌寺^ハ

被奉贈經候今度も左

様^ニ可有御座候定而

御公儀御作法先例次

第^ニ可有御座哉と奉

存候御別条無之旨

重而御左右不申入

後光明院様御崩御

之通御使僧^ニ而贈經

可奉候哉御報奉待候

恐惶敬白

道正庵

(延宝六年九)

六月十六日 貞順 (花押)

拜上 惣持寺五院

衣鉢閣下

24 道正庵貞順書狀（1—8）

尚々関東三ヶ寺と一封書

拙庵へ到来則此便相達候

御納受可被成候以上

八月十五日貴札忝拜見

東福門院御贈經

御焼香御使僧被相勤候

處首尾能相調御欣

悦御尤奉存候勸修寺

大納言殿へ御札札則

相達候將又御布施

鳥目五十貫於泉涌

寺拜領候是又勸修寺

殿へ御札狀為御登可

然被存候恐惶敬白

道正庵

（延宝六年九月）
十月朔日 貞順（花押）

惣持寺

五院

衣鉢閣下

25 道正庵貞順書狀（1—6）

改陽之嘉慶至悦

珍重申納候先以貴院

御無事貴山中御平安

可為御重歳故候此方

無別条罷有候

一 御當地無別条候

禁中邊一入弥無御別

条候

一 御年頭一昨日指上候

未奉書ハ降り不申候

一 去年勸修寺殿御札

狀返書此度指下候

御納受可被成候

一 東福門院御焼香御

諷經之御布施拜領泉涌
般舟兩山之帳面写此度
指下備御一覽候

一此方兩本寺之儀自身

御出候得八京五山并之

御布施可為拜領候御

使僧之事^ニ候故半分^ニ而

五十貫拜領^ニ而候江戸

増上寺も代僧故^ニ二百

貫之筈^ニ候へ共百貫拜

領被申候左様^ニ御心得

可被成候

一貴院へ参候百五十兩利

足銀三ヶ所旧冬請取

置申候慥成幸便指

下可申候此度瑞雲寺

雪中下向故無去

儀候猶期後喜之時

候間不能詳候恐惶

敬白

道正庵

(延宝七年九)
二月十六日

貞順 (花押)

芳春院

衣鉢閣下

26 道正庵貞順書状 (1—3)

幸便致啓上候貴山弥御無

事之由出世和尚衆御物

語承珍悦之至候此方無

別条罷有候

一 當今御庖瘡弥

御快然一宗之 綸旨

奏聞御座候^而 御不例

之中兩本寺^ニ而十七ヶ寺

其外在京衆十一ヶ寺今

日 綸旨頂戴仕候首

尾能候而大悦仕候貴山

御同前奉察候

一今度 御不例 勅願

所其外大地之諸寺御祈

禱御札被上候貴山之儀

ハ遠國故省略^二而不苦候

併以來加様之時分ハ御祈

禱札御上候儀可然候哉

左様候ハ、猶其時分此方^五

御相談可仕候

一去天 東福門院御布

施五十貫貴山^ハ拜領候右

之中四十三匁拙庵^ハ被下候

忝儀候其後御礼申入候様^二

覺罷有于今延引仕候

為文銀廿目拙者家来

益田惣兵衛拜領仕候冥

加至極難有仕合忝

奉存旨御礼申上候

一右之兩品引殘銀四百

八十七匁下當正月三日^二

相渡候則請取仕置候左

様^二御心得可成候

一江戸 御誕生之風聞

頓^而而^二可有御座候様^二

傳承乍恐目出度奉

存候猶期後音之間

不能詳候恐惶敬白

道正庵

(延宝七年九)
三月十一日

貞順 (花押)

芳春院

衣鉢閣下

27 道正庵貞順書状写 (6—1)

口上

一肥後大慈寺白堂^与申僧

曹洞宗^二而御座候処今度

致上洛清閑寺殿御肝煎

紫衣参 内望之事

一曹洞家之儀者

禁中御取次古今道正庵仕候

東照宮元和元年永平寺

總持寺曹洞之兩本寺^江

御朱印拜領以後

勸修寺殿傳 奏^二而相究

御座候然^ル処 清閑寺殿

御肝煎之段永平惣持

兩本寺^江申遣返事

承届不申入旨

勸修寺殿被仰渡候就其

彼兩本寺^江申遣候永平寺^と

勸修寺殿^江状参候御前^へも

状進上被申則私持参仕

差上申候以上

^(延宝七年カ)
未

道正庵

八月廿八日

御當番衆

御披露

(注) 27—33は『道正庵往来写』に合綴されている。

28 道正庵貞順書状写 (6—2)

一新敷事ハ江戸儀

被窺不申哉兎角事

廣罷成候ハ、如何様之

六ッ敷出来可申も合点

不参候大慈寺儀も道正庵

別而懇切^ニ存候故何卒

事無事^ニ相済申度願^ニ而候

一東照宮 御朱印

元和元年以前者兩本寺^と

公文請状御取候迄何も

長老分之衆着紫衣

候由 東照宮御法度

二而元和元年以來者兩

本寺之外ハ停止_二罷

成候

一 弥清閑寺殿御肝煎

御披露相究候ハ、必

為御知可被下候兩本寺_江

可申遣候若御沙汰無之候

得者以來御本所も如何

様之事可申候哉得覺

不申候間頼申候

一 此度之清閑寺殿其外

二而茂 公儀向_江者兎角

永平總持兩方_江申遣

御返事可申上由被仰遣

可被下候

29 道正庵貞順書状写 (6—3)

一 當月十九日勸修寺殿_ハ

被仰渡候肥後大慈寺

紫衣參 内被望候

勸修寺殿_江者何之付届も

無之清閑寺殿頼被申候由

菊亭殿御傳之由

此旨當山惣持寺_江早々

申遣御返事承届可

申入旨_二候則勸修寺殿_ハ

參候口上書之写指下

備高覽候

一 大慈寺之儀曹洞宗

二而候得者開山大禪寺_(師力)

以來古今道正庵

御取次仕候元和元年

東照宮御朱印以來

勸修寺殿傳 奏_二相究

罷在候故曹洞家^二而候得者

清閑寺殿構有之事^二而ハ

無御座候先為届清閑寺殿

^江も拙者^ハ口上書持參

付届仕候處大慈寺儀ハ

道正庵構申事^二而者無之

旨口上書も被戻候則

口上書備尊覽候

一大慈寺之儀曹洞宗^二而候

得者尊山御末寺^二而候

左候得者尊山付届無之

一宗之取次傳 奏構無之候^而

清閑寺殿被相頼候者非道

之樣^二被存候一宗之作法

相連 御朱印之趣

被背候^二可罷成候哉懸

右之通^二御座候ハ、其段

勸修寺殿^江尊書老通

此者^二為御登奉待候左候ハ、

多分被備

叡覽可申哉^与奉存候左樣^二

御心得尊書御調御尤

奉存候但曹洞宗^二而

無御座候ハ、又其通可被

仰談候

一十九日早々、以飛札可申

上之處何卒此元^二而

事無事^二相濟義^二候ハ、

仕度方々承合興聖寺

樣^江も相談申候故今日迄

延引之段 勸修寺殿

御腹立^二候故急飛脚

如斯^二候

30 道正庵貞順書状写 (6-4)

口上

一 肥後大慈之事(寺脫九)

永平寺開山与里三代目

義尹与申和尚二而曹洞宗二

其紛有間敷何之時代と

申始候哉其段ハ不存肥後

曹洞与申觸候是ハ世間

不構大慈寺迄二而居申候

故与被存候

一 義尹皇子之由二而

勅額其外書物等有之

様二申候寺内二而着紫衣

住持相勤候由他所江罷

出候時者墨衣二而徘徊之

様二傳承候大德寺中之二休派之様二候

一 曹洞宗故拙者家来

者每年解毒圓持参

其上道正庵代々牌

立置寄進物奥書迄仕

大慈寺二御座候其写懸御目候

一 曹洞一宗之儀ハ古来と

道正庵取次二而

禁中傳 奏江奉頼

就其日外懸御目候通

兩本寺と之證文取所持申候

一 東照宮 御朱印之通

永平寺總持寺之外紫衣ハ

停止二而御座候則一ヶ条

書拔懸御目候

31 道正庵貞順書状写 (6—5)

口上

今度永平寺書面

一宗之儀者御本所之外

傳 奏無他奉頼旨申

越候上ハ香衣参 内

其外諸事 禁中方

御執 奏之事ハ他家之

構有間敷事^二相究

罷在候其通可被申越事

新敷被入御急之義乍恐

却而如何可有御座候哉

今度永平寺状之通

他家構ハ無之由永平寺

申越候由^二而清閑寺殿

御構成間敷様^二可被存候

戸田越前守殿事ハ久

寺社御奉行故一宗之

作法得^与合点^二而居被申候

但重而御状可被遣候哉乍

恐存知寄候間内證如此候

如何様之儀^二而も御本所

仰^二候ハ、幾度も御吏可仕候

一清閑寺殿^江頼来候ハ定而

細川越中守殿と肝煎之

様^二風聞傳承候

右一ヶ条永平寺遣候書面

懸御目候書落候旨只今

書付進上

32 道正庵貞順書状写 (6—6)

覚

一昨日大慈寺弟子使僧^二

参候故對面相尋候今度

清閑寺殿^江妙解寺天岩

米田助左衛門兩所と頼入

被申越候越中殿ハ在江戸故

未年^江入不申候

一大慈寺作法世間之交ハ

黒衣^二而出合今迄江湖頭

不仕寺中^二而出世仕七拾

七人右之様^二申候左様^二候得者

御朱印以来一宗之作法

江湖頭不仕僧出世着黃衣

候儀不罷成候間黃衣之

望も如何可有御座候哉

一 去年大慈寺隱居

愚白大乘寺与名乘

出世被仕候是者去年

大乘寺^三而江湖頭相勤

其后永平寺^五吹拳状

相認申候以上

33 道正庵貞順書状 (6—7)

口上

今度肥後曹洞大慈寺^(宗脱カ)

白堂紫衣参 内之儀

奉願御執 奏之御

取持御座候由此段曹洞

兩本寺^江申遣様子承届

御報可仕旨 勸修寺殿

被仰渡候曹洞一宗之儀者

開山道玄^(元カ)以来古今道正庵

御取次仕候 東照宮

元和元年兩本寺^江

御朱印拜領以後

勸修寺殿傳 奏被成候

右之作法^二而御座候間

左様^二被 聞召置可

被下候為御届如此申上候以上

延宝七年未年

八月廿二日 道正庵

清閑寺様

閣下

(注) 27—33は『道正庵往来写』に合綴されている。

34 道正庵貞順書状 (1—24・25)

態以飛脚啓上一

昨日戸田越前殿^五

勸修寺殿牧野撰津

守殿呼_ニ參兩人昨日

同道_ニ而御出候處

一 大慈寺白堂紫衣參

内望之儀江戸寺社

御奉行へも越前殿相

談_ニ候一宗兩本寺之

外左様之事有間

敷由関東三ヶ寺數

年被相望酒井

雅樂頭殿御肝煎_ニ

候得共不罷成候白堂

事存外之由被仰

渡候

一 貴翰并永平寺之状

勸修寺殿と武家兩

傳 奏へ相渡り兩傳

奏と牧野撰津

守殿使_ニ而戸田殿へ參

候由傳承候

一 彼白堂事第一

御朱印違背本朝

_ニ而ハ何之遠國_ニ而も

如何様之小僧等迄為

存知事_ニ候處押付

被背候段第二傳

奏取次相定有之

處越訴被仕候第三

一宗之大本寺頭有

之所付届無之ない

かしろ_ニ被仕候大罪之由

戸田殿殊外腹立之

由_ニ候

一 今度白堂事今少

被経 奏聞候ハ、嶋へ

可被遣候_{左も無之}○仕合之由

越前殿御物語之由

傳承候

一 勸修寺殿へ戸田殿

被仰渡候趣白堂事

本寺吟味之上^三而如何

様^ニも本寺之仕置次

第可然旨委曲勸修寺

殿^方御状参候

一 去方^ニ而写し今度

大慈寺白堂

禁中へ指上申度願

^ニ而清閑寺殿^方

禁中御年寄中へ

被相渡候口上書一卷指

下懸御目候

一 清閑寺殿^方 禁中

御年寄衆へ参候口上書

写右同前

一 永平寺^方勸修寺殿

戸田越前殿へ参候状

之認書写右同前

一 戸田殿へ御状不被遣

段御尤候併 御當地

之○作法^御万事江戸御

老中同前^ニ而洛中

之儀ハ兎角越前

殿へ何も付届^ニ候以来

左様^ニ聞召可被置候

定而貴寺思召ハ寺

社御奉行被指置戸

田殿へ御状ハ越訴^ニ

罷成候と被思召候哉

と致推察候永平寺

方戸田殿へ状参候而

拙者持参對面一段

首尾能御報も参候

一大慈寺一件早々埒

御明御報可有之處

當月朔日二十一日迄

伊勢御神事二而

禁中邊出家之儀ハ

不及申俗入(八九)も被禁候

故昨日迄御延引と

致推察候恐惶敬白

(延宝七年カ)

道正庵

九月十四日

貞順 (花押)

尚々得与白堂事兩

本寺被仰合一宗之法式二

埒明之上以来之為二候間

今一應可願御報旨二候間

左様二御心得御尤二候以上

惣持寺

衣鉢閣下

35 道正庵貞順書状写 (1—26・27)

大寧寺和尚為輪住登山

候間呈愚翰候其御境弥御

無異之由珍重至極候御當

地相替儀無之候

一 釣水和尚登山之時分委曲三月十日

申入候得共于今吹拳状之儀

首尾無之候如何彼和尚登山

無之候哉先便無心元候間重而

申入候早々出世之衆急便次第

吹拳状為御登待居申候勸修寺

殿ハ態飛脚二而申下シ首

尾可申様二と申置候請合候

處于今延引拙庵難儀二

罷成候

一 雲州善慶寺芳淳長老

吹拳狀善之字点畫惡

敷候長老と御座候處和尚と

被書付候相違候故此元傳

奏披露難成候へ者色々侘

言拙庵請合先 綸旨頂

戴相調候日付ハ四月十三日

ニ候將又拙庵へ參候吹拳狀

善慶之善之字全之字ニ候

芳淳之淳之字順之字ニ而候

勸修寺殿へ參候吹拳狀相

違候得ハ如何ニ候間御書直

待申候兎角御念入相違無

之様ニ可然候左様之事候得ハ

禁中御輕之様ニ罷成勸修

寺殿殊外六ヶ敷一宗之出

世之和尚衆も殊外腹立被申候

一宗之取沙汰其御境之儀惡

敷出合申事ニ候間左様ニ御心

得御尤候

一今度大寧和尚へ妙高庵へ參候

金子參拾兩頼入指下候左

様ニ御心得御尤候

一將軍 宣下當月十八日

禁中ニ而相濟候

一近衛殿鷹司大將殿近日江

戸御下向ニ候公家衆不殘来

年ハ為御礼下向之筈被

仰渡候今迄ハ自分之御礼御

下向ニハ傳馬ハ出不申候處今

度ハ相應ニ傳馬人足出候由

是又始而相濟候

一大慈寺之事此方へハ兎角不

承候定而頃ハ江戸ニ而永平

堂上寺社御奉行へ御相談

可有之候其御境へ兎角御

左右無之候哉

一 今度増上寺御法事廿七日

結願之筈廿六日七ツ時分御

法事最中内藤和泉

殿乱氣^ニ而候哉永井信濃

殿一打^ニ而被切殺候以之外

法事之僧衆騒動故外

迄見得候而御法事^ニ被相

^(語カ)誥候諸大名家来衆取込

就其江戸中之騒動^ニ罷成

之由其御境候も左様^ニ聞得

候哉

一 一宗^ニ而候ハ、中之法事之中

左様之喧嘩出来候共騒

動仕間敷と被存候増上

寺之僧衆ハ散々^ニにけ崩候而

仏前踏崩候様^ニ申候一宗^ニ候ハ、

喧嘩之所へ可参と申事^ニ候

見苦敷様^ニ風聞候

一 永井殿跡目于今兎角之

沙汰無之候子息無之候右之

仕合候故何之遺言も無之候

左候得ハ丹後之儀ハ多分被

召上可申哉と風聞候舍弟

御小姓^ニ而出頭之由申候多分

此人へ一二万石之拜領^ニ而

信濃殿跡目など可被

仰付哉と風聞候

一 右之通^ニ候得ハ興聖寺之

丹後方参候式百石之寺領

上り可申候修理普請之

仕事無之候左候得ハ興聖寺ハ

衰微可仕候笑止千万此

事存候併境内其外茶

園仏前賽錢等^ニ而十人

斗之事ハ相續可申哉と

存事候何とそ跡目立候^而

前々之通仕度願^二候

一 福昌寺へ參候状共之儀未^{薩嘉}

相達不申候由傳承候徳元寺

出世之時分相渡指下候

定而別条有間敷と

存候併福昌寺住持遷

化之由左様之事^二而御報

無之候哉察申候拙庵方と

も 勅願所之首尾共

申談候へ者于今兎角之返

事無之候他事期後

音候間不能詳候恐惶

敬白

道正庵

七月廿三日

貞順 (花押)

芳春院

衣鉢閣下

36 道正庵貞順書状 (1-7)

薩州花舜軒為出世

登山候間呈一封候善慶寺

吹拳状御書直相達則

勸修寺殿へ致首尾最

前之吹拳状取戻此

度指下候并拙庵へ

參候吹拳状も御納受

可被成候先可申入貴院

弥御無異之旨珍重至

極候此方無別条罷

有候

一 法皇様近年御健

忘甚敷候近来殘暑

甚敷故歟御不食被遊

五七日以前 禁中へ

御幸初夜前と八ツ時

分迄御無言^二而

禁中邊上下騒動

仕候ハツ過御雪隠へ被為

成其後御機嫌宜御

座候得共其後ハ打續

御不食被遊以之外御草

臥被遊候由右之次第^ニ

候間此度ハ御快氣有

兼候半と何茂

禁中邊取沙汰^ニ而候

先御左右申入候何も自

諸山御見廻と申事ハ

無之候若他山其御境

并之方^ハ御見廻など

御座候ハ、見合可申候御氣

遣有間敷候

一大寧寺便宜妙高庵へ

金參拾兩事傳指下候

定而早々相達可申候

猶期後音之間不能

詳候恐惶敬白

道正庵

(延宝八年九)

八月十七日 貞順 (花押)

芳春院

近侍

37 道正庵貞順書狀 (1—18)

法皇崩御之間

態飛札如斯候万事

此元之首尾定而

東福門院御法事之次

第^ニ而可有之と奉察候

昨日之事^ニ候得ハ何事も

兎角之事知不申候何

方へ窺可申儀も早ク候

故万事重而御相談

可仕存候貴山御贈経

御使僧之儀最前之

通此元^二而相調可

申候少も御氣遣有間

敷候泉涌寺般舟

院兩所へ御贈經も

捧可申候若他山見合

相違共候ハ、重而可得

御意候先御吊状勸修寺

殿迄可然候乍慮

外案文懸御目候

此上貴院御思案

次第^二候五院へも其段

申談候

法皇崩御奉傳

承乍恐驚人奉存候

御席之刻

當今皇帝御前

宜御取成御悔御執

奏奉仰候恐惶

不次ケ様之文言如何

可有御座候哉此飛

脚急候間早々閣

筆候恐惶敬白

道正庵

八月十九日

貞順 (花押)

芳春院

衣鉢閣下

38 道正庵貞順書状 (1—23)

尚々丹波洞光寺方状

一通此便^二相達候急用之

由申来候間如斯候以上

去月十七日江戸御發

足御歸山之由傳承候間

呈愚翰候先以御續

目之御礼殊^二

御目見得迄首尾能
早速相濟候故珍重
奉存候御當地無別
条候

一 福昌寺 勅願所

之儀寺社御奉行_江

卒度御窺被成候哉

致承知度候

一 大慈寺事先月九日

閉門御赦免之由定_而

貴院御侘御蔭故

奉察候

後水尾院御贈經

御布施于今兎角

之御沙汰無之候定而

頓_而出可申哉と被存候

左候ハ、何茂諸山傳

奏へ相應_ニ音信

参候間見合可申候今

日有馬_へ發足早候

猶期後音之候恐惶

敬白

道正庵

(延宝八年九)

霜月十六日

貞順 (花押)

芳春院

衣鉢閣下

39 道正庵貞順書状 (1—4)

長崎光雲寺為出世登

山之条宜愚翰候先以雖

事旧候新陽之嘉瑞逐

日不可有休期珍重至極

申納候弥貴山御無異可

有御座奉察候御當地

御静謐愚庵無別条

罷有候

一 禁中御年頭指上御

奉書頂戴仕置候少も御

氣遣有間敷候

一 當月廿一日改元之御

沙汰^ニ候左候ハ、早々年号

以飛脚可申入候吹拳

状^ニ年号替候得ハ御執

奏不罷成候故右之通候

禁中之儀も御先代

相替御僉儀強万事殊

外六ヶ敷罷成候當時

も公家衆申分候而廿一

人閉門蟄居遠邊^ニ而

候故万端油断難成御

儀^ニ候左様^ニ御心得置御尤候

一 去極貴札則去極廿八

日之日付^ニ而御報指下候

定而相達可申候委曲

飛脚之刻可申入候間先

致省略候

一 海老屋仏師兩替方利

息銀之儀請取置候是

又飛脚之刻委曲

可申入候光雲寺早々

之故不能詳候恐惶敬白

(天和四年九)

二月十八日

道正庵

貞順 (花押)

芳春院

衣鉢閣下

40 道正庵貞順書状 (1 | 14 · 15)

態以飛札啓達先以貴

山御無異之由出世之和尚衆

御物語^ニ而承知珍重至極候

各寺御無事御勤致察候

一 今度 當今御即位

御諱朝之一字御避可

有之旨昨日傳 奏

勸修寺殿と被仰渡候

吹拳状和尚衆諱之分

以来朝之一字御除尤^ニ存候

為其早々以飛脚申入候

若朝之字御座候得ハ

御披露不罷成吹拳

状被書直候事故御左右

如斯候

一當月廿一日 御讓位同廿

六日 先帝御移徙

来四月廿八日 御即

位之由風聞^ニ而候御即

位之時分貴山と御祝儀

被仰上可然候哉何も諸

山承合重而御左右可申入候

一旧冬御札御年頭之賀

儀勸修寺殿五院と

御状慥^ニ致納例年之

通献上物相調御状

相添首尾能指上申候

則 御奉書拙庵^ハ

頂戴仕置候勸修寺殿

返状も同前請取置申候

重而指下可申候

一貴山吹拳状出世衆寺

号諱字形悪敷

且無念麁相^ニ相見得

候由勸修寺殿と每

度可申遣旨被仰渡候

左様^ニ御心得以来御念

入尤^ニ存候兎角真字^ニ

御調可然候

一御年頭五院と勸修寺

殿^ハ参候御披露状献

上物之品種書付無之

候故御披露之時如何^ニ

候由以来御書付越可

然旨是又被仰渡候来

年^ハ杉原十帖銀子

壹枚御状中^ニ御書入可

然候

一 旧冬福昌寺^ハ参候通幻

和尚三百年忌勸化銀

法幢寺又昌壽寺御上

京之時分数^ケ所^ハ預^リ

置候勸化銀共指下候

今度四柳和州上京之

時分^ニも方^々参候勸化

金銀并未進金目錄

仕指下候定^而御納受

致察候

一 和州事此度ハ早^々帰山

何之馳走も無之殘念^ニ

存事候猶期後便之

時候間致省略候恐惶

謹言

道正庵

^(貞享四年九)
三月十七日 貞順(花押)

惣持寺

御役者中

41 道正庵貞順書状(1—19)

尚^々和尚衆諱^ニ朝之一字

御座候得ハ執奏不罷成候故御書

直候間左様^ニ御心得尤^ニ候以上

態以飛札啓上貴山御

無異之由出世和尚衆御物

語^ニ而致承知珍重^ニ存候

一 今度 今上皇帝當

月廿一日御讓位同廿六日

御移徙来月廿八日御即

位之由候然ハ

今上皇帝御諱朝

之一字^ニ而候間御避可

被成旨昨日傳

奏勸修寺殿^ト被仰渡候

吹拳状和尚衆諱之分

以来朝之一字御除可被

成候若其早^々以飛脚

如斯候猶期後音之時候

恐惶敬白

道正庵

(貞享四年九)

三月十七日

貞順 (花押)

惣持寺

五院衣鉢閣下

致察候

一先月廿八日 今上皇帝

御即位御首尾能相濟申候

洛中洛外諸山御祝儀献

上物當月十四五兩日^ニ何も

被指上候住持職各参

内之献上物輕重品^々^ニ而候

一貴山之儀勸修寺殿^へ内證

御相談申候處一束一卷可

然旨^ニ而即十四日^ニ指上候

杉原十帖赤地金欄一卷

献上候一段首尾能事濟

申候勸修寺殿^へ貴山^ト御

祝儀之御披露状入申候間

幸便次第早^々為御登

可被成候但御判紙成共為

御登尤候此方^ニ而相認事

濟可申候

42 道正庵貞順書状 (1—2)

一筆啓達貴山弥御無異

一 勸修寺殿へ檀紙十帖銀

子壹枚同兩家遣へ金子

壹分宛貴山へ進物^二候

永平寺右同前之事候

一 永平寺へ勸修寺殿へ参候

書面之趣写指下候此上

御了簡御調為御登尤^二存候

一 御即位前 禁中御取

込故何茂出世和尚衆

綸旨頂戴不罷成候久々

在京も何茂迷惑^二候故

古例之通傳 奏へ御断

申吹拳状官物勸修寺殿

納置和尚衆何茂勸大納

言殿へ伺公大方勸大殿對

面^二而候愚庵證文相渡和

尚衆歸寺其中之 綸旨

愚庵へ頂戴仕置諸へ令

贈呈候是又首尾能古例

之通相濟候御氣遣有間

敷候 御即位以後ハ何茂

綸旨和尚衆頂戴^二而

歸國之事候何之時も

御公用之時分ハ右之作法

古今之例^二而御座候

一 今度献上物入用之注文

岡野源之丞方へ指下

申候猶期後音之時候間

令省略候恐惶謹言

道正庵

(貞享四年九)

五月廿三日 貞順 (花押)

惣持寺

御役者中

43 道正庵貞順書状 (1—5)

御飛札披見得其意候

先以貴山無恙各御無事

御勤珍重至極候

一 御即位御祝儀之御状

勸修寺殿へ五院と御遣候

得其意候則翌朝勸

修寺殿へ披露申候御返書

之儀ハ御障入候故當分

無御座候重而返状請取

幸便指下可申候

一 内々御奉書願候へ者諸宗

得も無之候諸大名へも無之

御事^二候 公方様迄之由

^二候

一 献上物之儀ハ洛中洛外

諸寺院と祝儀^御被申上候分ハ

住持自分^二持参

内^二而候へ者貴山之儀ハ遠國

之儀^二候得ハ勸修寺殿と

御取成^三而兩本寺と使

僧愚庵迄為御登候分

^二而拙庵と岡野源之丞

申候相濟候御年頭之時分

右同前之作法^二而候其通^二

仕候先書^二申入候通一段

首尾能御座候

一 諸山へ御祝儀之拜領物

之儀ハ寺ヶ寺も無之御

事^二候諸大名へも何も

使者衆傳 奏へ召出

御口上之 勅答迄^三候

左^三御心得置被成御尤候

一 御續目之 綸旨之

儀ハ諸山共^三左様之儀ハ

先規と無御座事候

一 御祝儀献上物代銀貳百

四拾四匁一分五リ^(厘)慥^二致納

相濟申候

一 伊賀廣禪寺と勸化

銀之由一包此度御飛

脚へ相渡申候猶期後

便候間早々申殘候恐惶

謹言

道正庵

七月四日

貞順(花押)

惣持寺

御役者中

44 道正庵貞順書狀 (1—1)

薩州得水軒登山之

幸便啓達貴山無恙

何茂御無事御勤令察候

一 禁中方一段御静謐

御當地相替儀無之候

一 先度御札潮音寺吹拳

狀潮之文字之儀被仰

越候通同声同韻之儀ハ

御構無之事候何之別

条も無之勸修寺殿へ

納リ申候以来左様ニ御心得

尤ニ候兎角朝之一字

之事ニ而候

一 御即位御祝儀献上

物勸修寺殿へ五院と

御狀參候御報と通并

兩家遣狀一通此度指

下申候御納可有之候

一 大坂天徳寺俊嶺和尚

と正福寺へ狀と通内ニ

金子入候由預リ置候何之

便ニ指下可申候哉御報

次第首尾可申候同寺と

洞川庵傳法庵へ狀參候

是ハ此度指下候

一下野長光寺乾徳寺ト

勸化銀之由鳥目壹貫

文代銀拾式匁預リ置候

是ハ此度拙庵家来

進藤亨兵衛御取次仕候

方ニ而候是又先預リ置

申候猶期後音之間令

省略候恐惶謹言

八月廿一日 道正庵

〔貞順〕
〔墨印〕

惣持寺

御役者中

45 道正庵貞順書状 (1—16)

今度吹拳状兩度書

誤ニ付為御断勸修寺殿ハ

太清院為御使僧御上

京御札披見得其意候

先以貴山無恙各自

御無異御勤珍重ニ存候

御當地相替儀無御座候

一 勸修寺殿ハ太清院吹

拳状相違之御断彼此

御付届御取持申候六月

十五日 東福門院之

御十三回忌御法事御

當日ニ而勸修寺殿彼寺

之傳 奏殿御障入共

打續同廿三日太清院

同道中勸大納言殿

御對面五院ハ御報茂

被相渡首尾能御付届

相濟申珍重ニ存候其

段可御心安候拙夫大慶

此事之大納言殿江

銀子參枚被遣候得共

此段ハ達而御断ニ而返弁之候

兩家老ハ茂金子貳片

ツ、是又同前之太清院

遊逸之御上京ニ候得共何

之御馳走も不申達殘念

此事之委曲太清院御

物語可有之候間省略申候

恐惶謹言

道正庵

(元禄三年九)

七月廿三日

貞順 (花押)

惣持寺

御役者中

46 道正庵貞順書状 (1—21)

尚々銀子壹枚為御

文実承奉存候以上

太清院勸修寺殿江為御

使僧上洛貴札拜見得其意候

先以 貴山無恙各自和尚

御安全珍重奉存候然者

勸修寺殿ハ吹拳状相違

之御断彼此宜御取成申入候

六月十五日御當日

東福門院御十三回忌於

泉涌寺御法事ニ付勸修寺殿

彼寺之傳 奏障入

打續延引同廿三日致同道

勸大納言殿太清院ハ御

對面御報茂被打渡候首尾

能御付届相濟珍重ニ存候

拙者大慶此事も委曲

太清院御物語可有之候者

致省略候恐惶敬白

道正庵法眼

(元禄三年九)

七月廿三日

貞順 (花押)

惣持寺

五院
貴報

47 道正庵貞順書狀 (1—12)

隱居卜順死去申候

義被聞召及遠境

早速為御悔御札殊^二

為御香儀金子式分

被下承存候拙者愁

歎之段御察可被下候

為御礼如此^二候恐惶謹言

道正庵

(元祿三年九)

九月廿一日

貞順 (花押)

總持寺

御役者中

法事之節以御

代僧御贈經

御焼香就御勤候

為御布施五拾貫

御拜領之由一段之

義^二被存候仍^而

大納言殿^江三百疋

被進候兼兩人方^へも

百疋宛送被下

辱存候受納不被申候間

兩人茂御断申候

委細自道正庵

可被申達候恐惶

謹言

立入河内守

二月十一日

□□ (花押)

三宅圖書助

□□ (花押)

48 勸修寺家雜掌立入河内守・三宅圖書助書狀

(1—11)

後水尾院様御

惣持寺五院

侍者御中

申達之由御沙汰候也

謹言

(四) 二十二世承順代

49 勸修寺前大納言經敬書狀 (2 | 4)

去八日當御地出火

禁裏院宮炎上

之處

玉體安全御假殿

皇居事候為窺

御機嫌使僧致差

登殊

禁中 白銀 貳百兩

仙洞 同 百兩

春宮 同 百兩

進上候書札即令

奏之處

御感之旨相心得可

勸修寺前大納言

(宝永五年九)

三月廿七日 經敬

總持寺五院

(五) 二十三世省順代

50 道正庵省順書狀 (2 | 5)

一 筆啓上仕候寒冷之節

一 弥御安躰御座候哉承度

一 奉存候

一 先月廿一日

御即位因茲當月十二日

御本山方御使僧先例之

通無滯差上申候委曲

御役者中迄申入候猶期

後音之時候恐惶敬白

道正庵

(延享四年九)

十月十九日

省順 (花押)

芳春院

衣鉢閣下

(六) 二十五世恭順代

51 道正庵恭順書狀 (4—6)

(包紙)

道正庵

京都^右

能^州

惣持禪寺

御役者中

道^(正庵)

急用

(本文)

猶々態以飛札可得夫意候得共幸

此節長左衛門登山仕故如此御座候

一 筆致啓上候先以

御本山御静謐各愈御堅固御努

可被成珍重御儀存候

一去月晦日朝寅下刻京都大火當月朔日

禁裏御所 仙洞御所

女院兩御所炎上并御堂上方不殘

御類焼 勸修寺殿拙庵迄茂類焼

仕候依之當分聖護院宮様之方^二

皇居被為成候早速 勸修寺殿^江

御驅合申上候処御瑞世御寺院方

奏聞次第 綸旨無滞降下之趣

被 仰出候尤從御本山茂

御所方御機嫌御伺并 勸修寺殿^江

御見廻之儀者先例通拙庵御取斗差上

可申候左様御承知可被下候右之段為

可得夫意如此御座候恐惶謹言

道正庵

(天明八年九)
二月五日

恭順

御役者中

玉床下

52 道正庵恭順書狀 (4-3)

(包紙)

能^(州)

京都

惣持禪刹

御役者中 道正庵

急用

(本文)

一 筆致啓上候時候追而春暖相催處

御本山御静謐各愈御堅固可被

成御座候珍重之儀存候然者今般

内裏炎上候得共瑞世御寺院方

奏聞相叶追々

数許 綸旨降下無滞頂戴相濟

難有仕合^二奉存候

一 炎上御機嫌御窺如先例拙庵方^二而

御取斗可仕候

一 禁中此節御庖瘡被為遊候依之

御機嫌御窺如先規取斗當月二日

無滞差上申候左様^二御承知可被下候尤諸

入用之儀者追而可得夫意候恐惶敬白

道正庵

(天明八年九) 三月五日

恭順 (花押)

御役者中

玉床下

53 道正庵恭順書狀 (4-2)

(包紙)

能^(道) 正庵

能^(州)

京都

惣持禪寺

御役者中 道^(正庵)

急用

(本文)

一 筆致啓上候追而向

暖氣候處

御本山御静謐各愈御堅固

御努可被成珍重御儀ニ存候

然者元書ニ申上候通拙庵儀も

今般類焼仕甚當惑仕誠亡

前後罷在候依之家来共を以

夏秋中ニ者御内々御窺可申

上儀茂可有御座候間其節者

何分可然様御許容被下度候

近年別而不如意之上此度之

災変進退失度申候何卒々々

御赦被遊被下候様奉願候

一 勸修寺殿方兩

御本山并関三刹可睡斎江

御使者を以此度之御難澁御助力

御頼被成度旨御内々御尊有

之候故達而御使者之儀御差當

申上候故左之者以書中御頼

可申上旨被仰付候定而近日之内

御沙汰可有御座候間御返答

為御心得不取敢以書中早々

得夫意候外之儀者兎も角も

何分拙庵之儀御赦被下候様

奉願上候差急乱筆御免可被

下候恐惶謹言

道正庵

三月十三日 恭順 (花押)

御役者中

玉床下

54 道正庵恭順書状 (4 | 4)

(包紙)

道正庵

總持禅寺

御役者中

恭順

玉床下

(本文)

猶、別紙之通近便飛脚便早、

為御登可被下候已上

一 筆致啓上候間辰暖氣

相催候處

御本山御静謐各愈御堅固

御座可被成珍重御儀^ニ存候

一 今般拙庵類焼仕候為御見舞

金子三兩拜領被^レ仰付難有

頂戴仕候右御禮被^レ取敢申上候

一 禁裏炎上御機嫌窺之儀

如先例献上物等粗支度等相調

近日差上可申處銀子調達難仕

種々工夫仕衣裳共并私懇意之者候

暫取替之儀相頼候得共此節之儀故

何茂不能其儀候^ニ付御内々

勸修寺殿^江暫延引之儀御断

申上候處不苦候間来月廿日頃

迄之内差上可然旨被申聞候依之

態以飛脚申上候扱々不調法成

儀を申上甚恐入候得共不得已而

申上候可然御取斗可被下候

一 先書^ニ申上候勸修寺殿^ニ雜掌中^ハ

御状^ニ通到来仕候故御達申候右之段

為可得貴意如此御座候恐惶謹言

道正庵

三月廿三日

恭順 (花押)

御役者中

玉床下

55 道正庵恭順書状 (7-2)

覚

一 禁裏御所 白銀二拾枚

一 仙洞御所 同拾枚

一 女院兩御所 同拾枚ツ、

一 長橋御局 同三枚

一 勸修寺殿 黄金壹枚

右黄金當時相場小判二拾兩餘も仕候故過分ニ存

勸家御雜掌中へ入懇仕黄金壹枚代小判拾五兩差上候筈也

一 勸家兩雜掌類焼 白銀三枚ツ、

一 勸家雜掌一人無類焼 白銀二枚

右類焼無之候得共 中納言殿御寄宿所ニ

相成候故諸宗一院之雜掌同様遣候得者兩

御本儀名分之相掛シ銀二枚遣候筈也

ノ金拾五兩

銀六拾壹枚

右之通御座候猶又諸入用之儀者追而

献上相濟候節可申上候以上

(天明八年九)

三月廿三日

道正庵

恭順 (墨印)

御役者中

(注) 首に「禁裏御所以下差上物之件」の添付紙あり。

56 勸修寺中納言書状 (7-5)

(包紙) 2 通共通

總持寺五院 勸修寺中納言

(本文)

去正月卅日

禁裏

仙洞 大女院 女院等

焼亡候処

玉體御安全被為渡候段

皇居御座之間為窺

御機嫌被差登使僧殊

禁中白銀貳百兩

仙洞白銀百兩

大女院白銀百兩

女院白銀百兩進献之

書札披露候処

御感之旨相心得宜申傳之由被

仰出候謹言

勸修寺中納言

(天明八年九)

五月十日

(花押)

總持寺五院

(別紙) (異筆)

杉原十帖

「禁裏御所

末廣壹本

白銀三枚

長橋御局

銀壹枚

小奉書二十帖

関白様

但し料銀貳枚可然

兩傳奏 白銀壹枚宛

杉原十帖

勸修寺殿

末廣一本

白銀貳枚

活丸殿

銀壹枚

御雜掌三人 金貳百疋宛

右兩本山同様宛

右勸修寺殿儀者兼々

兩御本山江御一派御助成御頼申之儀故

右御礼物ハ献上之場ニ相成候ハ、當家分ハ

可被免候事」

(注) 包紙に「禁裏御所焼失献上物之件」の添付紙あり。

57 勸修寺中納言書状 (7-6)

(包紙)

總持寺五院 勸修寺中納言

(本文)

芳札令披閱候仰

當家類焼ニ付為

御見廻黄金壹枚

贈給怡悦之至極候

猶使僧可為演説候条

不能巨細候謹言

勸修寺中納言

(天明八年九)

五月十日

(花押)

總持寺五院

(注) 包紙に「勸修寺家類焼見舞物之件」の添付紙あり。

58 道正庵恭順書狀 (4—1)

(包紙)

道正庵

御役者中

恭順

玉床下

(本文)

猶、越州と天寧寺へ金三百疋

宗仙寺へ金三百疋慈眼寺へ八類焼

無之候故御見廻候御狀斗承候將又

勸修寺殿御返書式通只今到来

仕故御達申上候

一 筆致啓上候秋暑

強御座候得共

御本山御静謐各愈御堅固

御努可被成珍重御儀ニ存候

一 内裏炎上御機嫌御窺

五月八日無滯相済申候御安心

可被下候則委細別紙を以

懸御目申候尤早速御沙汰

可仕候處拙庵儀も五月初と

大病相煩漸此節過半

本復仕候依之延引仕候

一 芳春院和尚ニ茂先頃

御上京折節御大病之處

此節段、御順快被成候由承候

御旅宿江御見廻申上度候共

拙庵儀も就大病不能其儀候

併青陽軒ニ者此方御見廻

被下復、得夫意大慶仕候

一 京都天寧寺宗仙寺

右兩刹者此度類焼仕候

慈眼寺者類焼無之候尤

右三刹兩

御本山御用之節ハ御代僧

被相努候寺院ニ而御座候間

御見舞之御狀被遣可然存候

尤越州御本山も御状并

御目錄等到来仕候右之段

為可得夫意如此御座候恐惶謹言

道正庵

(天明八年九)

七月五日

恭順 (花押)

御役者中

玉床下

猶々從類焼打続大病復

乱筆御免可被下候以上

59 道正庵恭順書状 (7-1)

(包紙)

上 道正庵

(本文)

奉願口上書

一今般拙庵儀御存致成下候通去ル申年京都

就大火類焼仕其後取繕等茂仕度奉存候得共近年

世上一統不景氣之上諸事差支多勝手向も吉凶

取交物入等多不都合^二御座候儀右類焼故一向

普請等難取懸甚以難儀仕候別而衆寮之儀者

諸國御瑞世之御寺院方火後追々就御上京不

取敢先假衆寮取調候而漸御間逢候事故中々

兩三年与者難堪持奉存候住居之所者如何様^二茂

相凌可申候得共衆寮之儀者難捨置候家来共も

居宅不殘類焼仕候得者是迄之通御寺院方

相分置候儀茂難仕挾假衆寮不都合之所追々

御上京被成候得者御不自由御難儀之段可申上様も

無御座候依之何卒急々衆寮普請取懸申度

奉存候得共右申上候通之仕合何を以与申方便も無

御座候差當御瑞世之御寺院方御難儀之程

奉察候得者此度諸國御一派之御寺院方へ御助力

之儀御頼申上度奉存候尤其國之御配頭之

御寺院方^江追々使を以其御配下之御寺院^江被

仰下御助力御取集被成下候様從拙庵御相對を以

御頼申上度奉存候此段於

御本山御間届被成下候様幾重^二茂奉頼上候

尤右之趣関東御三刹方江茂御届申上度候得共任

先例従

御本山何方可然様御沙汰被成下候様奉願上候

委曲之儀者賤使口上可申上候以上

道正庵法眼

寛政二年戊二月

恭順 (墨印)

總持禪寺

御役局衆中

(注)包紙に「寛政二年道正庵類焼ニ付助力願」の添付紙あり。

(七) 二十六世永順代

60 勸修寺権右中辨書状 (7-4)

院就

崩御遠境使僧

書面之趣及言上候処宜

申達旨長橋局被

命候也謹言

勸修寺権右中辨

(文化十年九)
閏

(花押)

十一月廿八日

惣持寺五院

(注)首に「仙洞御所崩御ニ付使僧之件」の添付紙あり。

61 道正庵永順書状 (4-5)

(包紙)

惣持禪寺

御役者中 道正庵

玉座下

(本文)

一筆致啓上候春暖之節

御座候處弥御堅固被成

御座珍重存候然者積年

勸家与里御一派江御頼之

一条ニ付拙庵御取扱方趣意

立旧冬田中正蔵を以御談申上候処

御一派御規模ニ茂相成候儀ニ付

御山内者勿論御後見方^二

おひても御随弁^二付其趣之

御添簡 関東表^江被

成進候由乍去御山法^二付為念

金沢御役所^江右一件其後

御届被成度尤扶桑國之事故

左而御子細者有之間敷候得者

年内及早春迄^二者御届済

之上其段今一應 関東表^江

可被仰進筈合^二而去^ル十二月正蔵

参 府御添簡共悉

差出置帰京委細致承知候

然^ル処當正月中旬

関東表御内評^茂被成下候

趣粗傳承仕候定而一件疾

御届済^二而 関東表^江此

節迄^二者被 仰進候哉^与奉存候へ共

此段承度如此御座候乍御面倒

否御書答奉傳候恐惶謹言

(文政三年九) 辰 道正庵

三月四日 永順 (花押)

惣持禅寺

御役者中

玉座下

猶々 勸家与里旧冬手續故

乍内々追々被為催促心配致候

此段御推察可下候哉

62 関三利連署書状 (7—3)

(包紙)

惣持寺 大中寺

御役局中 鑑司

(本文)

伏而復啓問辰酷暑之砌

各座下愈御堅剛^二可被成

御扶助之御状多幸之至^ニ

奉存候陳者旧臘三日御認之

御貴翰同廿日落手早速

致拜見候處從

勸修寺殿為御頼道正庵

使者田中正藏上

山有之其趣者去^ル酉年兩

御本山^ト為御合力三箇寺^江

御指出被為置候積金之内

御殿要用之儀^ニ付銀貳拾六貫目

這回御入手被成度尤残^リ

金者是迄之通子銀^へ致倍增候様

被成置度依而於兩

御本山右之旨趣御一同御承知

被為在其段被 仰越^ニ付

三箇寺^江も遂披露候處一同

致承知被在候

一一宗僧侶轉衣瑞世之

綸旨頂戴者於執

奏家仕来候處向後者

是迄之通

綸旨頂戴之上革而

禁庭御奏者所^江為御禮

参上仕候様被成度御本意者

参 内^ニ相準宗門之

規模各自美目依之雜費

官物之外白銀三拾目宛^ケ寺^ト

為差出候得者

御殿永世御潤色之補^ニも

被成度^ニ付雜掌山本彦左衛門殿

演説之趣意を以越州

本山監院和尚^ト被及御所談

兩 御本山區々^ニ不相成様

三箇寺^江相掛^ケ合も可被為在

之處 御山之儀者對

朝廷新條之願向者不依

大小事國衙^江御達し御許諾

無之内者表立御出願之儀者

從 御先代御制掟御座候^ニ付

道正庵使者御留置^ニ而早速

御取扱御座候處早急之御沙汰も

無之趣殊^ニ道正庵使者

指急^ニ付其意^ニ御任^セ然^ル上者

右一條衙聽之御沙汰次第

兩 御本山御同意^ニ而執

奏家^江御出願之儀御決被成

尚又三箇寺^江も其段御掛合も

可被成御含^ニ者御座候得共夫迄之

場合猶豫^ニ相成候段委細^ニ被

仰下一同致承知是迄御左右

相待被居候處去月十六日

御執筆之御芳翰當月十二日

落掌同十六日月並寄合^ニ付

評席^江遂披露一同致相閱候畢

然^ル處旧臘御達し御座候轉衣

瑞世之僧侶

禁庭御奏者所^江為御禮

参 殿御願方國衙表

御聞届依之兩 御本山

相同^シ弥執 奏家^江御出願

御治定之趣被 仰下一同

承知歡喜之至^ニ被存候因茲

自拙僧共再度之酬答

相兼而可預貴慮旨

関利被申付如斯御座候以上

大中寺

(文政三年九)

辰六月十八日 鑑司(墨印)

龍穩寺

鑑司(墨印)

總寧寺

鑑司(墨印)

惣持寺

御役局中

副啓

國衙之御沙汰御遅延^ニ付今般之

御達し遅々成候段御懇^ニ被

仰下之旨是亦一同々致承知候

右之御挨拶も申上候様^ニ申付候

已上

(注) 包紙に「勸修寺殿焼失^ニ付合力之件」の添付紙あり。

(八) 二十七世勝順代

63 道正庵定書 (7—7)

道正庵定書

定

一 永平寺一宗出世之寺院

綸旨拜請之者ハ勿論之儀其外就

禁裏願有之則受當寺惣持寺

之指揮宜以道正庵達傳

奏縦雖有外縁決而不可依頼事

一 轉衣之寺院着京之上者^(寄)奇宿に

道正庵之衆寮堅禁外宿從往

古之定法也已來堅可相守事

附

在京中^ニ轉僧各自炊之儀是又先規通可

相守若轉僧多分^ニ而衆寮住居難成節

庵主^ト致指揮配國之者私宅江可送衆

寮明次第歸寮候様取斗可申事

一 添簡并官物至着即日可差出

綸旨頂戴相濟候者早々可退出衆

寮尤遵守

高祖家訓而在京之間朝暮之勤

行不可懈怠且於寮内葷酒并烟

草堅停止之若於違犯之輩有之

者衆寮役人無遠慮急度可申断事

一 寺院并学侶^ニ而茂金銀借用之

儀ハ勿論惣而無心筒間鋪儀一切

堅停止之事

一 轉衣之寺院近年間、直綴掛^(綴)

落茂不致着用白衣^二而道中致往

來輩有之由粗相聞甚不法之至

宗風衰廢無此上事候萬一衆

寮迄茂右躰不如法^二而致着候輩

衆寮役之者兼而心得居一切取次

不可致若私意を以等閑^二見遁

取次候事後日於相聞者急度可及

其沙汰事

一道正庵家傳之神方解毒圓ハ承

高祖遺命每歲以專使令回賦

諸國一宗之寺院者宗門之古例也

愈可守其旨然處近年非類之

言承號道正庵解毒圓賣買

之輩往々有之由回使無油断遂詮儀

可令停止若及異論則急度可奉例

官衙者也

右之條、依先判之旨記之

永不可遺失者也

永平寺

嘉永元年戊申十月臥雲在判

道正庵

(注) 裏端に「永平寺臥雲發嘉永元年轉衣之儀^二付道正庵

定書」の添付紙あり。

64 田中正藏道章書狀 (2-1)

一 筆啓上仕候春寒之節

御座候處益御機嫌克被遊

御清座珍重之御儀奉恐賀候

一 今般之形勢不容易候儀奉

恐縮候就^而者為報國獻米

被仰出候条菴主^と奉奏上候通

御照察伏^而奉希上候然^二御獻米

代金并雜費入用^ノ金六百兩也

右別方を以奉願上候所何卒

御賢察被遊下格別之御尊配を以

御憐愍之御沙汰偏奉願上候

書外上林長左衛門殿^方被奉奏上候

間御清聴之上宜御披露

奉希上候恐惶謹言

田中正蔵

(慶応四年九)

正月廿三日

道章 (花押)

御本山

御役局様

御側中

65 道正庵勝順書状 (2—2)

一 筆啓上仕候春寒之

節御座候處弥御安泰可被成

御座珍重之御儀奉存候

一 當正月三日^方形勢奉恐入候

儀^ニ御座候依^而從

勸修寺殿御内意承

御本山為御代僧慈眼寺

相頼八日為奉窺

禁中 御機嫌執奏家迄參

殿無滯相濟候

一 今般之形勢^ニ付正月十日執

奏を以被 仰出為奉報

天恩御本山^并御一派共金穀

献納之義被 仰出付而者悉遠路

之事故即今之所道正庵

取斗を以御一宗報國之御趣意

相立候様別紙を以懇^ニ蒙

御諭候条々^々乍恐暫御猶豫希

上候處專諸山窺之最中今

相渡候而者一宗之瑕瑾等も難斗

殘念^ニ被存候段一入御利解無是非

儀^ニ奉恐察正月十二日伺書相認

兩御本山^并御一派共合而

玄米百石宛拾ヶ年之間献納

之儀奉窺候通正月十三日被

聞食候段參與衆と蒙御沙汰

然ルニ十五日御達當年之分百石

来ルニ廿日上納被仰出忽ニ差迫

心配難届候處何卒御規模

相立候様直ニ盡氣力先以無滯

献米仕候条御届申上候付而者

御手當等急来扱之義も御座候

ニ付悉上林長左衛門申含候御清聴

被成下速ニ御沙汰奉待候

恐惶謹言

道正庵

(慶応四年カ)
正月廿三日 勝順 (花押)

御本山

御役局中

玉座下

66 某書状 (2-3)

今般賊徒追伐被

仰出官軍諸道江被差

向候付而者於

朝廷萬一粮米闕乏

之義も被為在候而者不容易

御次第ニ付夫々有志之

輩不抱金穀為奉報

天恩献納有之候得者曹

洞宗両本山并一派之寺

院有志輩江申諭シ早々

献納可有之候併兩本

山始遠路之義ニ付彼是

往覆遅延ニ相成候而者

不可然候間先即今之

処於道正庵御趣意

被相含精々盡力報

國之趣意相立候様被

取斗其上諸國之末

派江不洩樣可有御通

達候事

(九) 年代不明

67 勸修寺侍從書狀 (2—8)

改曆之吉兆不可有

盡期候為御祝儀杉原

十帖白銀十兩献上之則

及披露候處女房奉書

被出候不相替珍重存候

將又自分江青銅百疋

被相贈之祝着之到至候

猶永日可申達候条不能

詳候謹言

勸修寺侍從

正月廿六日 (花押)

惣持寺五院

68 勸修寺前左少辨書狀 (2—7)

改曆之吉兆不可有盡期候

為御祝儀杉原十帖

白銀十兩献上之則及

披露候處女房奉書被

出候不相替珍重存候將又

自分江青銅百疋被相贈之

祝着之至至候猶永日可申達

候条不能詳候謹言

勸修寺前左少辨

二月朔日 (花押)

總持寺五院

69 勸修寺前大納言書狀 (2—9)

改曆之吉兆不可有盡期候

為御祝儀杉原十帖白銀

十兩献上之則及披露候處

女房奉書被出候不相替

珍重存候將又自分^江青銅

百疋被相送之祝着之

至^三候猶永日可申達候

条不能詳候謹言

勸修寺前大納言

二月十日 (花押)

惣持寺五院

70 勸修寺前大納言書狀 (2—6)

尚々 從中納言以謝狀可

申處病中間拙官令

啓報章候也

関東為御沙汰

禁裏御領嚴重之段

寺門輩賀儀言上候間

從當寺以使僧被奏

之旨及披露首尾宜

趣從道正達聞喜悅

之由得其意候因茲

為祝儀小高檀紙十帖

白銀十兩各々贈給

入念候義存候尤可

辞申候処芳志之儀

却而如何与令受納

畢猶期誨慶候

謹言

勸修寺前大納言

四月廿九日 (花押)

惣持寺五院